

知の集積と貯蔵の場所として

兵庫県立ひょうごこころの医療センター 院長 田中 究

“本がなくなる” 経験をしたことがある。医局の机の上に置いていた本がなくなる、貸していた本がなくなる、電車の中に置き忘れて本がなくなるということではない。離島の病院に勤務した際に、学生時代から読みためた書籍とともに引っ越した。5年の勤務の間に再読することはほとんどなく、その地を離れるときに文庫本のほぼすべてをその地の図書館に置かせていただいた。その後、ふとしたときにその文庫本を再読したくなって、書店に求めに行くと、目的の本がないのである。その著者の書籍は全集になっており、文庫本としては最早出版されていないということに、その時はじめて気づいたのであった。その後、その著者の書籍は少しずつ文庫本として、値段は随分上がったが、再び販売されたのであったが（柴田翔、高橋和巳、福永武彦らの小説であった）。つまり、“本はなくなる” ことをその時認識した。エリック・ドルフィーの『ラスト・デート』の中の名言 “When music is over, it’s gone in the air. You can never capture it again.” が頭をよぎる。出会いは一度、もう一度捕まえるなんてできないよ。

書籍も商品であるから、その時の売れ行き（流行）に左右されて、供給がなされ、需要が乏しくなれば供給も減るといったことのようなのである。別の機会に、出版社には在庫が少しくらいあるのではないかと問い合わせたことがあるが、そんなものはないと言われたことがある。別の編集者に尋ねた際には、出版し続ける価値のある書

籍と考えていても、赤字を抱えるわけにはいかないので売れない本は刷れない。出版社が次々と消えていく中で、次の価値ある書籍のためにはと苦渋の選択だと言われた。オンデマンド出版も少しあるが、かなり高額になるという。ネット販売で容易に書籍が手に入るようになり、すっかりネット販売が定着すると、今度は電子書籍への移行が始まって、ますます出版業界は厳しいようだ。

なくなった書籍は古書店で購入する手があるが、古書店の価格はネット大手の古書の価格にほぼ連動している。おそらく神田神保町あたりではそのジャンルの専門店があるのかもしれないが、地方都市ではそこまで専門化していないから、近くの古書店を巡って見つからなければネットで注文することになる。最近、20年ほど前に出版された書籍を購入しようと探してみたが見つからず、ネット検索すると当時の定価の20倍ほどの値段がついていて、驚愕してしまった。決して、専門書でもなく、とって大きな話題となったものでもないで、出版部数の少ない書籍だからなのだろうと推測している（最近では『みんなが手話で話した島』（築地書館））。

こうした経験があるせいか、その後、出会った書籍をしばらくは読まないだろうと思う書籍でもできるだけ購入し、手放すことをせず、ツンドクすることが多くなった。そうするといきおい自宅は書籍の山になり、床から何本もの book trees が生え、家人から処分を言い渡されることになる。それで職場にそれらを置いてもいつかは限界が来て、病院図書館に譲ればそこに保存

してくれるかと期待してしまう。

駆け出しの頃、大学病院を離れて市中病院で研修をすることになって赴任した病院は、当時は個人経営の病院だったが、小さな図書室があった。その小さな図書室に並んだ書籍の数はさほど多くはなく、その多くは実用的な臨床ガイドブックであったが、少なからず院長の個人蔵書も並んでいた。いま考えれば、きっと自宅にはおけなくなったそうした書籍が並んでいたのだろう。大学病院で研修中に師匠から何度も推薦され、原書（ドイツ語）は手に入っても日本語版は絶版となっていた本がそこにあった（吉永五郎訳『分裂病の発動過程』（医学書院）のことである。その後、新訳され山口直彦・安

克昌・中井久夫訳『分裂病のはじまり』として岩崎学術出版から出版された）。別の推薦本も埃をかぶってはいたが隅に並んでいた。ラボリ著『侵襲に対する生体反応とショック』（最新医学社 1956）で、これは現在も稀覯本である。

医学の進歩は日進月歩である。常に最先端の知識が医療者に伝達されていく必要がある。その供給元の一つに病院図書館があるだろう。一方で現在に到る道筋を振り返り、先達の思考や経験から、自らの営為を検討することも必要である。そうした時に知の集積と貯蔵の場所として病院図書館の役割は大きいのではないかと、またそうあってほしいと考えている。